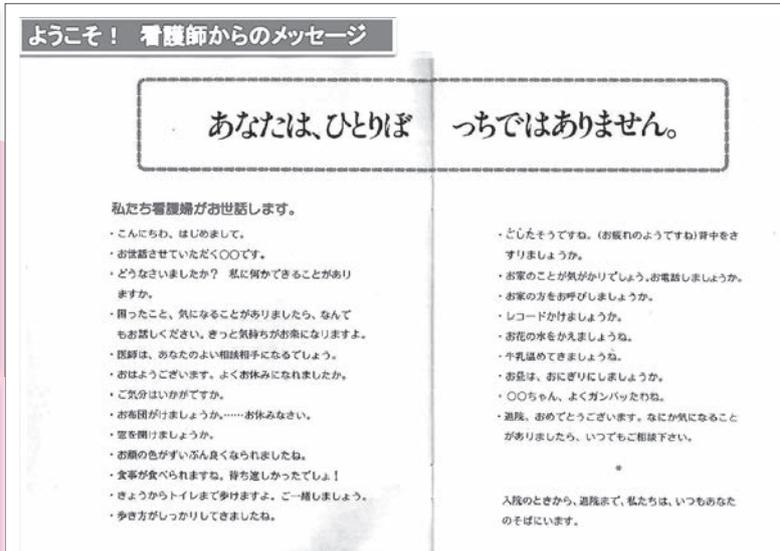
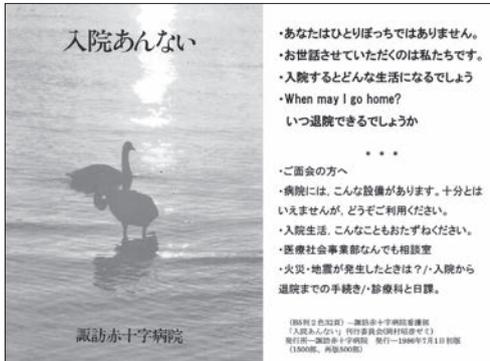


病院は誰のためのものですか？ ——「ようこそ!」と呼びかけた「入院あんない」



「入院あんない」
あなたは一人ぼっちではありません。
お世話させていただくのは私たちです。
◎諏訪赤十字病院看護部 (1986年7月1日発行)

◆21世紀の看護を考える 『入院案内』

コロナ禍は2年目をむかえたが、この間印象に残っている記事がある。英国政府が病床不足を補うために、2012年のロンドンオリンピック・メイン会場に巨大な「野戦病院」を開設し、その名も「ナイチンゲール病院」と命名したことだった。

ベッド数は当初の500床から4000床に。転用にかかった日数はわずか9日。そして開設の式典には、新型コロナウイルス感染症から回復したチャールズ皇太子(71歳)がビデオ電話で、「ナイチンゲールが戦地で多くの病人らに希望と癒しをもたらしたように、この場所も人々にとって輝く光となるだろう」というメッセージを送ったというのだ。

そして、その病院の入口に「WELCOME」の大きな看板があることに気づいたとき、わたしはおもわず「オー、ウエルカム! ようこそ!」と口にしなから、思い出したことがあった。

今から35年ほど前(1980(85年)、岡村昭彦※は名古屋、京都などで「21世紀の看護を考える」セミナーをおこなっていた。そのなかで長野県の諏訪赤十字病院の看護ゼミ(25名)には、卒業制作として「入院あんない」(32頁)を予定して、当初からわたしは編集サポート役を務めていた。ところが、岡村の急逝により、引き継ぐことでよりこだわったのが看護師たちのメッセージ「ようこそ」だったのである。

※岡村昭彦(1929~1980) 報道写真家。1964年ベトナム戦争取材でアメリカの雑誌「LIFE」に特集9頁掲載。「南ベトナム戦争従軍記」(岩波新書・1965年)。アメリカ海外記者クラブ賞、他多数受賞。晩年はバイオエシックス(生命倫理)、看護改革、ホスピス運動に取り組み、1985年3月24日敗血症のため56歳で死去。「岡村昭彦集」(全6刊・筑摩書房)、「定本・ホスピスへの遠い道」(春秋社)。写真展「岡村昭彦の写真—生きること死ぬことすべて」(東京都写真美術館2014)。没後に岡村昭彦の会が発足、会員約300人。研究誌「シャッター以前」を発行している。

この3月、岡村昭彦の会の研究誌『シャッター以前』7号は、そのテーマ「岡村昭彦と自主ゼ



『シャッター以前』

vol.7 (2021年3月)

◎岡村昭彦の会 (発売・川島書店)

1,100円 (税込)

*特集「岡村昭彦と自主ゼミの時代」。

ミの時代」にそって、「入院案内」制作をともした二人の今もなお現役ナース(奥原ます子さん、松木博美さん)に「ようこそ」へのこだわりを訊いている。奥原―介護老健施設ではたくさんの掲示があるけれど、そこに「してはいけない」「しなさい」という案内を目にすると、そのことばが気になります。「これは禁止のことばだなど」おもったら「入院あんない」作ったときのことを思い出し、仕事のなかでハツとします。

松木―それこそ岡村さんがよく口にした「健康な部分にちゃんと注目しなさい、光をあてなさい。ここはあなたの生きていく場所のひとつなんです」。そういうメッ

セージをわたしはいまも思い出しますね。

この二人にとって「ようこそ」とは、看護師のプライドであり、意志。態度にほかならないことがわかる。

◆「入院心得」から「入院あんない」へ

制作当時、各地の日赤病院をはじめ、60〜70の病院に入院案内の資料を求めたが、お手本になるものや、刺激を受けたものはなく、「病院案内」が送られてきたこともあった。「入院案内」はまた「入院心得」だったり、「入院の手引き」だったりした。

そして、テキストに選ばれたのは、岡村がアイルランドで目にした「セント・パトリック病院」の入院案内だった。翻訳グループがつけられ、そこで出合ったのが「ようこそ」であり、「お世話させていただきますのはわたしたちです」という

メッセージだったのである。また、「面会時間」については時間厳守を大事にしていたが、目指したのは少し違っていた。たとえば、『面会の方へ』には、「三つのお願ひ」の選択肢をつくったり、「患者さんは皆さんに勇気づけられます」といったことばを添えたりの手作り感を大事にした。

かくしておよそ2年。B5判32頁の「入院あんない」は、【発行所・諏訪赤十字病院 看護部 発行・1986年7月1日初版】と明記し、初版部数は1500部(10年後には500部増刷)。病棟病室内のすべてのベッドに備えられた。

* * *

「入院あんない」は岡村の目には触れることはなかったが、当時私がどんな位置で制作に関わろうとしていたか、三つの点を確認しておきたい。

一つは、「21世紀の看護を目指す入院案内」といったレポートを目指した看護師たちの総意でつくられたものであり、私は制

作補助者であること。

二つは、ゼミを通して披露した岡村昭彦の思想(看護・医療に対する考え方)を打ち消さないようにすること。むしろ、積極的に採用しようとしたこと。

三つには、編集制作のアドバイザーとしての私の役割に、もうひとり患者の立場を重ねたこと。要するに入院患者の一人として制作に参加してみたこと。

これらは、10年後に『看護学雑誌』(1996年7月号・医学書院)が「看護婦がつくった入院案内 諏訪赤十字病院の取り組み」と題して30頁の特集を組んだ際に明記している。